

富永神社祭礼奉納

と き 平成十一年十月八日(金)  
午後四時四十五分始  
ところ 富永神社能楽殿

能 組

仕舞

老松殿  
月宮殿  
西王母山  
雲雀山  
鱗形

島尚大郎  
島考三郎  
佐野仁美  
平野瑞季  
平野阿裕美

狂言

痺

太郎冠者 赤堀玲奈

主 福井紫織  
後見 加藤賢一

仕舞

月宮殿  
猩猩殿々

今泉友美  
中嶋薰

仕舞

月宮殿  
月慈童殿々

鳥居久仁子  
佐野菊代  
谷野允千帆

狂言

文 荷

太郎冠者 大原正巳  
次郎冠者 天野雅夫

主 畑中良雄  
後見 加藤賢一

仕舞

芭蕉殿  
玉之段

今泉利夫  
本田洋子

(休憩 三十分)

能 杜 若

シテ 今泉英三

ワキ 竹内省吾

大鼓 清水利高  
小鼓 福井啓次郎  
地謡 竹内三郎  
森田收

後見 鈴木肇

地謡 太田研司  
高林白牛  
中嶋康夫  
高林白牛  
田中洋二  
太田康弘

狂言 二人袴

舞 水谷至男  
男 小林常男

親 酒井宏  
太郎冠者 権田重紘  
後見 畑中良雄

4:45分頃

5:00分頃

5:25分頃

5:40分頃

6:05分頃

7:00分頃

8:00分頃

8:35分頃

連管 中之舞

加藤 太田 今泉 酒井 加藤 研司 英三 規

8:45分頃

舞囃子 羽衣 鈴木

肇 大鼓 清水 利高 六兵衛 大鼓 中嶋 康夫 小鼓 永田 六兵衛 苗 今泉 英三

9:00分頃

狂言 引括 男 加藤 賢一

妻 安形 忠久 女 佐野 元之助 女 山口 俊一 女 西山 好夫 女 小澤 貞博 後見 畑 中 良 雄

9:20分頃

半能 高シテ 清水 利高 砂

ワキ 竹内 三郎 大鼓 河村 真之助 小鼓 森田 收 大鼓 中嶋 康夫

後見 鈴木

肇

地謡

加藤 貢 竹内 省吾 牧野 修 高林 伸二 田中 洋二 高林 白牛 口二 鈴木 崇史 太田 康弘

(終了予定九時五十分頃)

主催 本町区

あ ら す じ

狂言

痺

塚へ使いにいくよう命じられた太郎冠者は、行きたくないの痺れが起こって歩けないと嘘をつく。飯病を見抜いた主人は、伯父から振る舞いによべれたが病氣ならば連れて行けまいと言って太郎冠者をだます。太郎冠者は治ったといつて急に元氣になったので、それならば塚へいけといわれ……

狂言

文 荷

主人から手紙の使いを云い付けられた太郎冠者と次郎冠者、手紙の宛先は「せんみつ殿」と呼ばれる若衆です。日頃から主人の若衆狂いをにがしく思っている二人の冠者は、主人の陰口を言い合ひながら交替で手紙を持ち歩きますが、ついには竹棹の中央に手紙を吊り下げ、二人で肩にかついで行きます。所詮持ちたくもない手紙、肩にくい込む余りの重さに、何ごとが書いてあるか興味半分、とうとう二人は手紙の封をとりてしまします……。手紙をかついで能「恋重荷」の一節を謡いながら道行きをし、封をとりてしまえば扇であおぎ散らすなど、多分に能のパロディを意識させます。

能

杜 若

諸国一見の僧が都から東国へと志し、旅を重ねて三河国へやって来ます。とある沢辺に杜若の花が美しく咲いているので、思わず見とれていまずと一人の里女が現れ、ここは八橋という古歌にも詠まれた名所であり、昔在原業平が東下りの際ここで休み「かきつばた」の五文字を各句の頭において「か」らころも きつなれにし つましあれば はるばるきぬる たびをしぞおもふ」という歌を詠んだという故事を教えてくれます。その上旅僧を自分の庵に案内し、泊まってゆくようにすすめます。やがて女は初冠（ういかむり）に唐衣（からころも）を着てその姿を見せにくるので僧は驚いて素性を尋ねます。女は自分が杜若の精であると明かし、また業平は歌舞の菩薩の化現であるので、その詠歌の功德により非情の草木も成仏したと告げ、さらに「伊勢物語」や業平について語り、舞をまいやがて消えてゆきます。そこには紫の花のおもかげが残っているばかりでした。

狂言

二人袴

大安吉日に妻の実家へ初めて挨拶に行く「聲入り」をすることになりますが、恥ずかしくて一人では行けないので親について行ってもらいます。親の方はすぐ帰るつもりで長袴は一つしか持つて行きませんでした。ところが先方の門前で太郎冠者に見つけられ、初めは一つの袴を代わる代わるにはき替えて舅の前へ出ていきましたが、兩人一緒にと言われ、さて、その首尾は……

狂言

引 括

口うるさい妻に嫌気がさした夫は、妻に迷惑を掛けるのが悲しいと言いますが、妻は取り合いません。そこで夫は里へ帰って二、三日遊んで来い。足らずば二十日、三十日、いや五年でも十年でも気のすむまで遊んで来いと言います。やっと夫の気持ちがあつた妻は、暇のしるしが欲しいという。夫は何でも好きなものをもっていけと大きな袋をやる事にします。さて妻が袋に入れたものは……

能  
高砂たかさご

九州肥後国（熊本県）阿蘇宮の神主友成は、都に上る道すがら、播州（兵庫県）高砂の浦に見物に立ち寄ります。たそがれ近い浜辺には吹くともない微風が松の枝にそよぎ、尾上寺の人相の鐘が響いてきます。そんな静かな景色のなかに、夫婦と覺しい抜群に年たけた老夫婦が墨絵のように現われます。友成は老人たちをみて、高砂の松の由来を問います。老翁は古今集の序にある高砂住江の松を「相生」とよびわれを語り、また高砂を遠い奈良朝に、住吉をいまの延喜の聖代にたとえ、松の緑の尽きないように御代の栄えも変わらぬという古代の言葉を伝えます。友成はめでたい由来をきいて大いによろこびなお詳しい松の物語りをせがみます。

老翁は更に語をついで、松が四季を通じてその緑は変わらず、花は一千年に一度ひらくという「生」の象徴として古来から異国でも本朝でも賞讃されているなど、さまざまな例をあげ、二人は相生の松の精が仮に老夫婦の姿になって現われたのだと明かして沖の彼方にさえてしまっています。

友成は日の出とともに高砂の浦を出帆して住江の岸に到着します。すでに夜も更け、中天高く月が澄みわたると、さらめく波間から住吉明神が出現して、国土安穩寿福千年を祝う神遊びの舞を舞います。波頭は青海波の舞樂、颯々と鳴る松風は聖代を謳歌するかとも聞えてめでたい限りです。

半能

一番の能の前半をほとんど省略し、後半のみを演ずる演能方法である。